

標識調査と鳥類保護—各国での実例—

尾崎清明(山階鳥類研究所)

鳥類標識調査の主要目的は、個体識別をして得られる生態解明である。渡りの生態、すなわち、種毎の移動経路を実証し、各繁殖個体群の越冬地や重要な中継地を地図上に明らかにする。また渡りの時期やスピード、幼鳥の分散なども含まれる。さらに、野生鳥類の最高寿命や生存率の推定、主要死因、繁殖開始年齢など、個体群生態研究に欠かせない資料も得られる。

また、標識調査は、その地域の鳥類相をより正確に把握することに役立つ。さらに、種類や亜種、性別や年齢などの基礎的知識も、生きた鳥を手にするることによって次第に増えてきた。頭骨の骨化現象や、虹彩色によって年齢を判定する手法も確立してきた。

しかし、近年は特に鳥類保護への活用が重要となってきた。それは、鳥類の保護に欠かせない実態把握の諸調査の中で、標識調査の持つ、正確・基礎・詳細・広域・統一・大量・継続・国際的など多くの特色が、他の調査では真似のできないものであるからに他ならない。ここでは、現在行われている各国での取り組みについて紹介し、今後の日本での参考としたい。

ドイツのMRI(Mettnau-Reit-Ilmitz)プログラム:

1974年開始。ドイツとスイスにある3個所のステーションで、毎年6月下旬～11月初旬の約4カ月間、同位置・同数の網を張り放しにして渡り鳥を捕獲、全個体の計測値を収集。目的は、a. 個体群動態の把握 b. 渡りの経路や生理の研究 c. 体内時計や方向定位に関する資料の収集 b. 食性や環境選択の基礎資料 e. 種・性・齢の識別方法、捕獲方法、資料の統計処理方法などの研究などである。



ボーデン湖畔の調査地(広居忠量氏 撮影)
モニタリングサイトとして利用するため、かすみ網の位置や枚数は固定されている。

イギリスのCES(Constant Effort Sites)プロジェクト:

小鳥類の個体数年変動を広範囲かつ長期間モニターする目的で、1981年から開始された。5月から8月の間、12日間(毎週1回)同じ枚数の網を同じ場所に設置して、鳥を捕獲する。幼鳥の捕獲数から年毎の繁殖成功率が、成鳥の再捕獲率からは生存率が導き出される。現在110カ所(1995)の場所で調査が継続されている。さらにフィンランドやフランスなどでも始められている。

その結果、例えばスゲヨシキリやノジロムシクイでは1989年以降個体数の増加がみられ、反面ウソでは成鳥の数が減少している。クロウタドリやベニヒワ、オオジュリンでは、繁殖個体数が継続的に減少している、などが判明してきた。

アメリカのMAPS(Monitoring Avian Productive and Survivorship)プログラム:

チェルノブイリ原発事故による放射能が、アメリカの陸鳥の繁殖率低下に影響していると推測された。そこで、1989年から、かすみ網を用いた定常的な調査を開始した。1994年までには300カ所において、10枚(12m30メッシュ)を単位に定期的(日の出から6時間、5月1日から8月28日の間10日に1回でシーズン12回を基準)に標識調査が実施されている。ボランティアが多くのステーションを支えているが、鳥類個体数研究所は3分の1のステーションで調査をしている。森林局、国立公園局など多くの他機関の協力を得ており、国防省の援助も増加している。これは遺産資源管理計画のなかで、MAPSプログラムもその一部を構成するものとされているからである。毎年鳥類個体数研究所は数十人の、主

として大学生のボランティアを養成している。

主な目的は、陸鳥の長期間にわたる個体数変動をモニターすること、バンダー自身が鳥類の保護管理に直接関与・貢献すること、国有林や国立公園、軍有地などの国有地を全国規模で長期間の鳥類調査に活用することなどである。

編注: 講演要旨は以上ですが、当日の講演では標識調査についての包括的な講演をしていただきました。その内容がとてもわかりやすく、またよくまとまっていたので、前頁(標識調査の意義)を作成するにあたって大いに参考にさせていただきました。[山階鳥類研究所のHP](#)にもわかりやすく解説されているので、そちらもご覧になるといいと思います。

[このページのトップへ戻る](#)

[調査の概要と意義へ戻る](#)